自由社ブックレット3

戦争を仕掛けた中国になぜ謝らなければならないのだ！

―「日中戦争」は中国が起こした―

「史実を世界に発信する会」
茂木 弘道

Booklet Liberty 3 自由社

自由社ブックレット3
戦争を仕掛けた中国になぜ謝らなければならないのだ！
茂木 弘道

9784915237881
1920031005005
ISBN978-4-915237-88-1
C0031 ¥500E
自由社
定価：本体500円＋税

Booklet Liberty 3 自由社

なんと戦争を起こした張本人は
中国ではないか！

ケント・ギルバート
米国カリフォルニア州弁護士

ビックリの史実が
次々に明かされていく！
読後感は一言「目からウロコ」！

反日親中論調のニューヨーク・タイムスですら
1937.8.31号で次のように書いている。

「上海の戦闘に関する限り、証拠が示していている事実は一つしかない。日本軍は上海での戦闘を繰り返すことを望んでおらず…事態の悪化を防ぐために出来る限りのことをした。だが日本軍は中国軍によって文字通り衝突へと無理やり追い込まれてしまったのである。」

はじめに

茂木 弘道

日本と中国の過去の戦争についてのいわゆる謝罪問題について、次のような対極的な見解があります。

・相手国が「すっきりしたわけじゃないけれど、それだけ謝ってくれたから、もういいでしょう」というまで謝るしかないんじゃないかな。[1]　―村上春樹

・中国は日本に感謝し、靖国神社に参拝せよ。―黄文雄（こうぶんゆう）

村上春樹氏の見解は、多くの日本人が何となく思っている、「日本は中国を侵略した」という考えに基づいています。侵略に対する贖罪意識を徹底化して、ここまで良心的になるべきだというわけです。

1　27年4月17日に共同通信のインタビューに答えたもの。（「産経抄」27年4月25日より）

しかし、この見解には二つの大きな問題があります。

一つは、日本が中国を侵略したということを絶対的な前提にしていることです。「何を言うか、中国大陸の中に日本軍が入り込んで戦争をしたのだから、侵略に決まっているではないか」と多くの人はいうかもしれません。

では次のようなことが起こったと仮定してみましょう。「安保条約に基づいて日本に駐留しているアメリカ軍に自衛隊が一方的に戦争をしかけ、〝日本国内〟で戦闘が始まった」という仮定です。日本国内なのだから、アメリカ軍は侵略軍に決まっているといえるのでしょうか？アメリカ軍の駐留が気に食わないということはあったとしても、この場合、国際法的には侵略者は自衛隊ということになるのです。

ですから、中国大陸で戦争があったということよりも、「日中戦争はどちらが仕掛けたのか」ということがより重要な問題となります。本書は、その問題についての回答を提出しようとするものです。絶対的な前提としていたものが、全く逆であったことを知っていただけるものと思います。

二つ目は、講和条約に係る問題です。日本と中国との戦争は、中華民国時代の「日華平和条約」、中共政府との「日中共同声明」「日中平和友好条約」によって最終決着がついています。戦争ですからお互いに色々言い分もあるし、恨みを残すこともあるでしょう。しかし、それをいつまでも引きずっていては、その後の正常な国と国との関係を築いていくことは難しくなってしまいます。そのために、講和条約によって「決着」をつける、というのが人類が歴史の中で育んできた智慧ということができるかと思います。

村上氏の言う「相手がいいと言うまで謝る」というのは、この人類の知恵に真っ向から背き、人間感情を絶対化する、極めて低次元な考えということになるのではないでしょうか？　これが良心的とはとても思えません。

講和条約で決着しても、個人の恨みは別だというかもしれません。そういうことを言い出したら、「個人的」には中国人の理不尽な仕打ちを絶対に許せないと思っている日本人もたくさんいるでしょうし、その逆のケースもあるでしょう。ですから、それを言い出したらきりがなくなりますよ、ということです。

いわんや、この個人的な問題を国家レベルの問題に紛れこませて「日本は」ということになると、講和条約を結ぶ意味や精神が台無しになってしまいます。ですから、第一の日本が侵略したのかどうかという問題は別にしても、「いつまでも」謝り続ける、などというのは、良心的どころか、人類の智慧を無視して前近代に退行する考え方であるということになります。

黄文雄氏の見解は、一見奇矯で、過激な、偏った見方のように見えるかもしれません。これは『歴史通[2]』という雑誌に寄稿された論文のタイトルなのですが、論文は極めて論理的であり、

豊富な事実に裏付けされた上での結論としてこう言っているものです。

まず最初にこのように言っています。

「日本軍は中国やアジア各国に対して侵略、虐殺、暴行、略奪を働いたというのが中国側の主張であると同時に、戦後日本人の一般的な歴史認識でもあるが、台湾では違う」

「台湾人は幸い、東京裁判史観に染まることがなかった。だから日本の戦争が、まさしくアジアのレコンキスタ（失地回復）であり、それによって欧米植民地勢力が駆逐された史実を率直に受け止め、〝日本が負けたことが悪かった〟」というのです。

台湾人は東京裁判史観に染まることがなかった、すなわち、ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGIP）[3]によって洗脳されなかったので、史実を率直に受け止められるのです。そうすると、「日本および日本人は、一体、日中戦争の何について反省しなければならないというのか」という主張になるというのです。

「内戦停止、農民・飢餓の救済、列強による分割の阻止…どれをとっても中国は日本に感謝こそすれ、批判すべき筋合いはない。侵略？　冗談ではない。愚かな民族を隣人に持った不幸な日本に対して、謝罪すべきは中国である」と結んでいます。

内戦の停止、えっ？　と思うかもしれませんが、黄文雄氏が述べているように、一五〇年に及ぶ中国の内戦は何千万もの犠牲者を生み出し、辛亥革命[4]後も内戦は続き、日本軍の進出によってその内戦が停止された、というのが実態です。日本人のあまり知らない戦争ですが、安直

戦争、奉直戦争、中原大戦など一九三〇年に至る国民党内戦七年間の犠牲者は、林語堂[5]氏によれば総計三千万人に及ぶと推計されています。日本は何も平和な中国に一方的に介入していったわけではありません。

日本が中国の農民・飢餓の救済などというと、あまりにも意外に思われるかもしれませんが、黄文雄氏は「進駐してきた日本軍は掠奪を行うどころか逆に、既に台湾、朝鮮、満州で行ってきたように、生産計画を立て、生産を指導・支援し、地主に苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）をやめさせ、土匪の襲撃から農村を守り、食料の確保と農民の救援に躍起となっていたのである」と書いています。

農村の指導にあたったリーダーの一人が小沢開作氏でした。指揮者の小澤征爾氏（この名前は板垣征四郎、石原莞爾からそれぞれ征、爾をとったものです）の父親です。満州国で農村救済活動の実績を上げ、中国本土でも農民のために尽力したのでした。

このように、黄文雄氏の見解は、戦勝国史観である、東京裁判史観に洗脳されず、史実を率直に受け止めた結果、出てきたものであるということができます。ゆえにこちらの方に理があ

2　『歴史通』平成27年3月増刊号。英訳付きの冊子として、「史実を世界に発信する会」より刊行。定価300円。10部以上割引価格200円。

3　マッカーサー総司令部（GHQ）が行った日本民族から独立心を奪い、戦争贖罪意識を植え付ける洗脳工作。『日本人を狂わせた洗脳工作』（関野通夫）（自由社）参照。

4　1911年、清朝を倒し共和派による中華民国を成立させた革命。

5　中華民国の文学者・言語学者・評論家。1940年と50年の2回ノーベル文学賞候補にノミネートされている。

ると私は思っております。

本書は、以上のような問題意識をもって書いたものですが、日中戦争のきっかけと言われている、盧溝橋事件[6]、上海事変[7]（その後の南京戦）とはどのようなものであったのか、戦争を仕掛けたのはどちらであったのかに焦点を当てたものです。これが〈本編〉です。

しかし、東京裁判では、満州事変[8]を日本の侵略の開始とし、中国も十五年戦争の始まりとしていますので、これについても簡単に取り上げておきます。これが〈前編〉です。

そもそも、満州の地は満州族の清朝の発祥の地であり、最後の清朝皇帝愛新覚羅溥儀（あいしんかくらふぎ）が皇帝になったのですから、中国がこれを侵略だなどと言えた筋ではないのです。

しかし、中華民国が清朝の遺産を引き継いだというのが、何となく国際的に通っているため、中国の不当な主張がまかりとおっているわけです。その理不尽さ、満州国傀儡（かいらい）政権説の間違いについても簡潔に述べていこうと思います。

〈後編〉としては日本は中国に対してどのような対し方をしていたのか、特に和平への取組み、また、日本が提案した和平条件はどのようなものであったのか、について触れたいと思います。

本書をお読みになれば、日本は中国侵略をしたという贖罪意識を持つのは、実は事実に反する見当違い、すなわち間違っているということをご理解いただけるのではないかと思っています。

なお、日本政府は上海事変後、日中の戦いを「支那事変」と名づけましたが、本書は「日中戦争」としています。その理由の第一は、あの戦いは中国政府が総動員令を発動して仕掛けてきた戦争であり、事変などと呼べるレベルではなかったことです。又、満州事変後、長いスパンで日中の戦いを一般的に言うとしたら、「日中戦争」というのが適切、といおうか、それしかないかと思います。「支那事変」はある特定の時期の戦いということになるかと思います。

もし疑問の点などありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

平成二七年九月一日

6　1937年7月7日、北京西南方向の盧溝橋で起きた日本駐屯軍と中国第29軍との衝突事件。

7　1937年8月13日、中国軍が上海の日本人居住区の租界を守る海軍陸戦隊に対して一斉攻撃をかけてきた事件。14日には中国軍は航空機も動員して全面攻撃を行い、本格的な戦争へと発展していった。

8　1931年9月18日、奉天北方の柳条溝で起こった南満州鉄道路線の爆破を契機として関東軍が、国民政府の張学良軍に攻撃をかけて敗走させ、満州全土をわずか1万の兵力でたちまち制圧した事件。翌年の3月には満州国が成立。

戦争を仕掛けた中国になぜ謝らなければならないのだ！
―「日中戦争」は中国が起こした―

目次

まえがき　2

〈前編〉　満州事変……15

なぜ一万四百の関東軍で満州を占領できたのか　17

次々と自治委員会が成立、独立を宣言した満州の実力者　18

リットン報告書　21

大東亜会議における張景恵満州国総理の演説　22

世界一の超高度成長国家を実現　24

「十五年戦争」という虚構　26

〈本編〉　盧溝橋事件・上海事変（南京事件）……29

上海事変こそが「日中戦争」の始まり　31

戦争を仕掛けたのは紛れもなく中国であった　33

盧溝橋事件も中国が仕掛けた　34

中国の攻撃には必然性があった　36

そして盧溝橋事件が起こった　38

共産党が仕掛けた動かぬ証拠「七八通電」　42

盧溝橋事件の徹底拡大を図った共産党　44

北支事変と通州事件　46
通州大虐殺！　47
これ南京虐殺のことではないか？　50
日本国民激昂、暴支膺懲の世論沸騰　52
中ソ不可侵条約秘密軍事協定　53
中国の全面攻撃、海軍陸戦隊の奮闘と陸軍二個師団の派遣　55
中国機による誤爆で多数の中国人、外国人が上海で殺傷された　58
南京城攻略命令　59
南京大虐殺がどうして起こるというのか？　60
南京虐殺は当時中国国民党政府も主張していなかった　63
胡錦濤主席への公開質問状　66
南京占領後の和平条件と「蔣介石政権対手とせず」声明　71
〈後編〉　日本の対支政策……75
北支分離工作は侵略行為だったのか？　77
上海事件後の和平工作（トラウトマン工作）　80
「蔣介石政府を対手とせず」声明以降の近衛対支政策　81
「派遣軍将兵に告ぐ」に見る日本軍の対支姿勢　83
あとがき　86